

## 祈りの言葉

水俣病で命を落とされた方々、そして今も苦しんでいる方々に、私たちができることは何なのでしょう。水俣病の公式確認から67年目を迎えた現在でも、新聞やニュースなどでは「水俣病」という言葉が見られ、水俣病は過去の出来事ではないことを感じます。そのために、水俣に住む私たちにできることは正しい知識を身につけ、水俣病のことや水俣の良さを未来に伝えていくことだと考えます。

私たちは、水俣に学ぶ肥後っ子教室や総合的な学習の時間などを通して、今まで水俣病について学んできました。そこでは、語り部の方から水俣病の歴史についての話を聞いたり、水俣病の患者さんはどんなことに困り、苦しんできたのかを学んだりしました。また、患者さんとの交流から、苦しみを乗り越え、明るく前向きに生きておられる姿に、「私たちも頑張ろう」と勇気をもらいました。その中でも私が心に残っていることは、今でも差別や偏見が根強く残り続けているということです。このような、差別、偏見のある社会はいけないと思います。私はどんな人も公平で差別されることなく幸せに生きていくことができる世の中にしていきたいと思いました。

私たちの学校では、2001・水俣ハイヤ節という、杉本栄子さんを中心に作られた踊りを毎年踊り続けています。困難なことでも笑顔と楽しさで包み込み、前向きに生きていこうという栄子さんの思いを大切にし、私たちは全力で踊っています。この踊りを通して、学校全体で「水俣病」について学習を進めてきました。そして、「水俣病」がもたらした多くの被害や、環境を守ることの大切さを次世代に伝えるとともに、全ての人大切にされ、安心して生きていくことができる社会をつくっていかねばならないと考えています。今後も私たちがこの踊りを受け継ぎ、差別や偏見のない水俣・日本・世界をつくっていきます。

最後になりますが、私は水俣病を教訓として、環境モデル都市に生まれ変わり、また、SDGs未来都市として、持続可能な地域社会づくりに取り組んでいる水俣に生まれたことを誇りに思っています。だから、誰になんと言われても、私は堂々と水俣市出身とすることができるようになりたいと思います。そして、差別に負けず、生まれ育った美しい水俣の良さを多くの人に届け、全ての人幸せに暮らしていくことができる社会をつくっていきたいと思います。

起きてしまったことは、なかったことにはできません。

だからこそ、私たちは仲間と共に何をすればよいのかを考え、行動を起こしていこうと思います。

私たちは水俣の環境保全に取り組み、二度と同じ過ちを起こさず、水俣病の教訓を生かし、素晴らしい未来をつくっていくことを誓い、祈りの言葉といたします。

令和5年5月1日

水俣市立袋小学校 塚田 暁斗